わたしの聖ジハード戦

女性が働くということ

連236載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

6月16日に想うこと

梅雨の時期、6月16日は和菓子の日だそうな。

語呂合わせで、やたら「○○の日」と命名したがる風潮には少々辟易（へきえき）していたが、これは少し事情が違うらしい。

由来は、848年までさかのぼる。

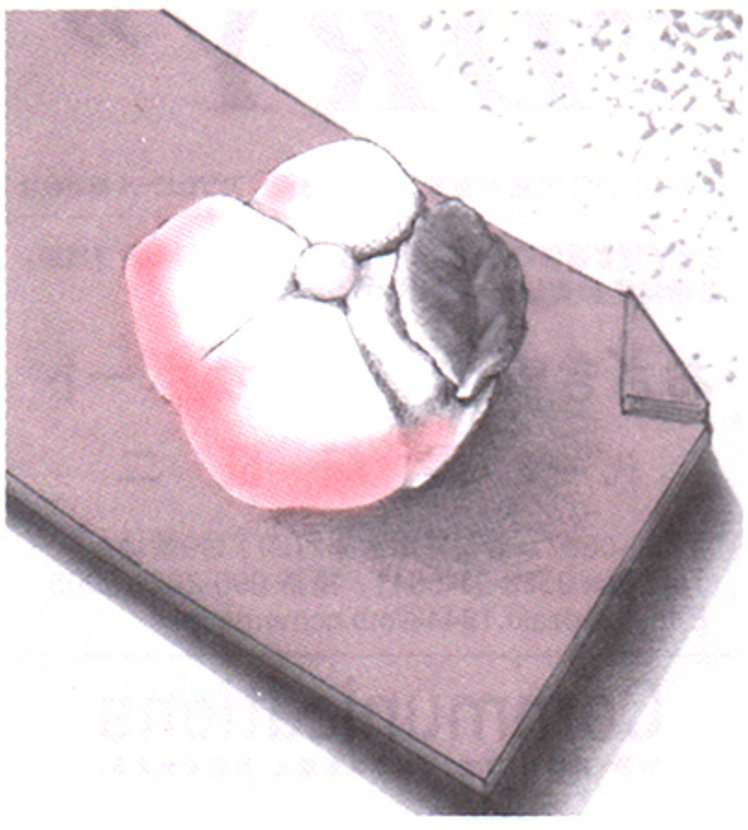
当時、はやり病（疫病）が国中の人々を苦しめていた。そこで、仁明天皇が元号を嘉祥（かじょう）に改め、6月16日に16種類の菓子を神前に供え、疫病退散を祈ったという。

一連の儀式は「嘉祥の儀」と呼ばれ、長く受け継がれていく。豊臣秀吉や徳川家康など、時の権力者たちもこれにならい、6月16日には、たくさんの和菓子を重臣たちに配り、やがてそれが庶民にも広がっていった。

江戸時代になると、16の「1」と「6」を足して「7」、7種類の和菓子が売られるようになった。数や種類は時代で異なっていても、厄払いの願いを込めた和菓子の存在は細々と伝えられ、今にいたるという。

はやり病のターゲットは子どもたちだ。7歳までは神の子であり、7歳を過ぎてようやく名前をつけた、との言い伝えもある。免疫が十分でない子どもたちは、それこそ原因不明の病になす術もなくバタバタと死んでいった。ほんの200年前まではそれが現実だったのだ。

はやり病とは、感染症のことである。細菌やウイルスなどの病原体が知られていなかった時代において、突然襲ってくる病の流行は、天災と同様かそれ以上に恐ろしいものだった。



赤い色が魔除けになると信じられ、赤い衣服やおもちゃなど身の周りを赤で固めた時代も長く続いた。今考えると、何の根拠もないことだが、他になす術がない親たちの切実な思いが伝わり、哀しみを誘う。

今では、感染症の予防としてワクチン接種が推奨され、原因となる病原体を攻撃する治療薬の開発も進んでいる。感染症で命を落とす子どもたちは、特に先進諸国では大きく減少した。だからといって、感染症がなくなるわけではない。それどころか、病原体の遺伝子は目まぐるしく変化し、医学の進歩が追いつくかどうかの確証はない。感染症のみならず、子どもたちは、常に危険にさらされている。

近年、毎日のように報道される虐待やいじめ。アメリカでは、学校などでの銃の乱射が絶えない。本人には何の責任もない貧困も、大いなる災害のひとつだ。戦火に逃げ惑う子たちもある。世界に目を転ずれば、悲惨としかいいようがない事態が起こっている。

6月16日を和菓子の日とした仁明天皇は、菊を好んだと伝わる。菊の花ことばは「高尚」「高潔」「高貴」であり、菊花紋章は天皇家の家紋にもなっている。品種改良された洋菊も美しいが、和菊のひそやかなたたずまいは、日本人の目に優しく馴染（なじ）む。

菊は、観賞用だけにとどまらず、長寿の妙薬として食されてきた歴史を持つ。時々和食に菊が添えられているのを見かけるが、単に飾りとしてではない彩りが一層食欲をそそる。見慣れた花である一方で、深く私たちの生活に根付いた花でもある。

今の子どもたちを取り巻く環境を知ったら、仁明天皇は何を思うだろうか。

せめて、菊の美しさを愛（め）でる心を育てて欲しい。それは大人の役割だと、お叱りをうけそうで、菊の花をまともに見られない自分がいる。

イラスト・伊藤香澄